

# 病虫害発生予報 第4号(7月予報)

和歌山県農作物病虫害防除所  
TEL 0736(64)2300

## ＜予報の概要＞

作物名	病虫害名	発生量	作物名	病虫害名	発生量
水稲	いもち病 紋枯病 縞葉枯病	並 並 紀北: やや多 紀中・紀南: 並	野菜全般	ミナキイロアサミウマ ミカンキイロアサミウマ シロイチモンシヨトウ	並 並 やや少
	ニカメイガ ヒメトビウンカ ツマグロヨコバイ セジロウンカ トビイロウンカ コブノメイガ	並 並 並 やや少 並 並	カンキツ	黒点病 かいよう病 ミカンハダニ ヤノネカイガラムシ チャノキイロアサミウマ ゴマダラカミキリ	やや少 並 やや多 並 やや多 並
ウリ類	疫病 べと病 うどんこ病 つる枯病 炭疽病	並 やや少 並 やや多 並	カキ	炭そ病 うどんこ病 円星落葉病、角斑落葉病 フジコナカイガラムシ	並 並 並 やや少
トマト、ナス、ピーマン、シシトウ	疫病 モザイク病	並 やや少	モモ	せん孔細菌病	やや多
野菜全般	アブラムシ類 ハダニ類	やや少 並	果樹全般	カメムシ類	やや少

## 気象予報

1か月予報（予報期間 6月29日～7月28日 大阪管区气象台）

＜予想される向こう1か月の天候＞

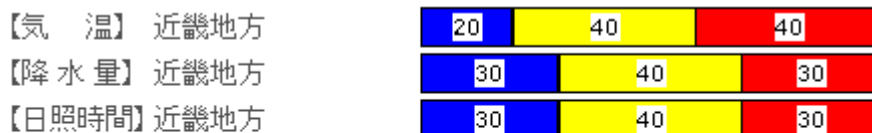
向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、平年並または高い確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、平年並の確率50%です。2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

＜向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（％）＞



凡例: ■ 低い(少ない) ■ 平年並 ■ 高い(多い)

		月平均気温 (平年値) (℃)	月降水量 (平年値) (mm)
7月	和歌山	27.0	和歌山 145
	潮岬	25.5	潮岬 291

# I. 水 稲

## 1. いもち病(葉いもち)

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 6月4半旬の紀南地域(田辺市以南)の早期水稲における発病株率は0.7%(平成0.0%)と平成並であった。

② 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 補植用苗は葉いもちの発生源となるので、早急に処分する。

② 常発地及びコシヒカリ、キヌヒカリ等の罹病性品種では発病しやすいので初発時期に注意し、発生が見られたら直ちに薬剤防除する。

## 2. 紋枯病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 6月4半旬の紀南地域(田辺市以南)の早期水稲における発病株率は、0%(平成0.0%)と平成並であった。

② 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 梅雨明け後の高温期から病勢が急激に進展するので、常発地や前年の多発ほ場では幼穂形成期～穂ばらみ期の防除を徹底する。

## 3. 縞葉枯病

(1) 予報内容 発生量 紀北地域：やや多、紀中・紀南地域：並

(2) 予報の根拠

① 和歌山市およびかつらぎ町におけるヒメトビウンカ(越冬世代)のイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率は、いずれも10%以上と前年(それぞれ16.1%、15.9%)に引き続き高かった。地域の保毒虫率が10%を越えると発病株が多くなるとされている。

② 6月4半旬の紀南地域(田辺市以南)の早期水稲における発病株率は0%(平成0.0%)と平成並であった。

③ ヒメトビウンカの7月の発生量は平成並と予想される。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① ヒメトビウンカの防除を行う。

## 4. ニカメイガ(紀北地域)

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 紀の川市の6月1～4半旬までのフェロモントラップでの誘殺数は0頭である(平成0.2頭)。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 7月上旬の被害茎率が6.2%以下なら防除の必要はない。

## 5. ヒメトビウンカ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 6月4半旬現在、紀南地域(田辺市以南)の早期栽培では、発生を認めていない(平成25株あたり0.2頭)。

② 予察灯による6月1～4半旬までの誘殺数は上富田町0頭(平成0.3頭)、那智勝浦町1頭(平成0.4頭)、紀の川市3頭(平成2.3頭)である。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 箱粒剤等を育苗箱施用した6月田植えのほ場では、7月の防除は特に必要としない。

## 6. ツマグロヨコバイ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 6月4半旬現在、紀南地域（田辺市以南）の早期栽培では、発生を認めていない（平年25株あたり1.4頭）。
- ② 予察灯による6月1～4半旬までの誘殺数は上富田町1頭（平年28.1頭）、那智勝浦町24頭（平年11.3頭）、紀の川市0頭（平年9.9頭）である。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① ヒメトビウンカに準ずる。

## 7. セジロウンカ

(1) 予報内容 発生時期 やや遅 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 6月4半旬現在、紀南地域（田辺市以南）の早期栽培では、発生を認めていない（平年25株あたり10.7頭）。
- ② 予察灯への初飛来は、那智勝浦町では6月4半旬（平年6月2半旬）と平年と比べやや遅く、紀の川市、上富田町では6月4半旬現在、飛来を認めていない（平年初飛来時期：紀の川市、上富田町ともに6月2半旬）。
- ③ 予察灯による6月1～4半旬までの誘殺数は、上富田町0頭（平年72.8頭）、那智勝浦町2頭（平年31.7頭）、紀の川市0頭（平年32.6頭）と平年に比べてやや少なかった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① ヒメトビウンカに準ずる。

## 8. トビイロウンカ

(1) 予報内容 発生時期 並 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 6月4半旬現在、紀南地域（田辺市以南）の早期水稲では、発生を認めていない（平年25株あたり0頭）。
- ② 予察灯による4月から6月4半旬までの誘殺数は、上富田町0頭（平年0.2頭）、那智勝浦町0頭（平年0.1頭）、紀の川市0頭（平年0.3頭）と平年並である。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① ヒメトビウンカに準ずる。

## 9. コブノメイガ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 6月4半旬現在、紀南地域（田辺市以南）の早期水稲では、発生を認めていない（平年25株あたり被害葉数0葉）。
- ② 紀の川市の蛍光灯誘殺箱への6月1～4半旬の誘殺数は、0頭（平年0頭）である。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 幼穂形成期前後の被害は収量に影響するので、今後の予察情報に注意する。

## Ⅱ．野 菜

### <ウリ類>

#### 1. 疫病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
  - ① 露地栽培スイカにおける6月5半旬現在の発生ほ場率は、紀の川市で0%（平年0.0%）、日高地域で0%（過去5年間の平均0.0%）であった。
  - ② 7月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
  - ① ほ場の排水を良くし、冠水や滞水を防ぐ。

#### 2. べと病

- (1) 予報内容 発生量 やや少
- (2) 予報の根拠
  - ① 施設栽培キュウリにおける6月5半旬現在の発生ほ場率は、紀の川市で27%（平年56%）であった。
  - ② 7月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
  - ① 施設栽培では換気を良くし、湿度低下を図る。
  - ② 露地栽培では排水を良くし、薬剤を予防散布する。

#### 3. うどんこ病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
  - ① 施設栽培キュウリにおける発生ほ場率は6月5半旬現在、紀の川市で20%（平年34%）であった。
  - ② 7月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
  - ① 同一系統の薬剤の連用は耐性菌の発生を助長するので、他系統の薬剤とのローテーション散布を行う。

#### 4. つる枯病

- (1) 予報内容 発生量 やや多
- (2) 予報の根拠
  - ① 露地栽培スイカにおける発生ほ場率は6月5半旬現在、紀の川市で0%（平年8%）、日高地域で79%（過去8年間の平均0%）であった。
  - ② 7月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
  - ① 降雨にともない株元から茎葉に病勢が進展するので、梅雨期の防除に重点を置く。

#### 5. 炭疽病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
  - ① 露地栽培スイカにおける6月5半旬現在の発生ほ場率は、紀の川市で0%（過去2年間の平均29%）、日高地域で7%（過去2年間の平均67%、平成19～22年：散見される程度）であった。
  - ② 7月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
  - ① 発病茎葉や果実などは、ほ場外に持ち出す。

- ② 雨滴等により病勢が進展するので、梅雨期の防除に重点を置く。

## <トマト、ナス、ピーマン、シシトウ>

### 1. 疫病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
- ① 紀の川市の露地栽培ナス、トマト、シシトウでは6月5半旬現在、発生を認めていない。
  - ② 日高地域の露地栽培ミニトマトにおける6月5半旬現在の発生ほ場率は33%で、発生ほ場では初期病斑が認められた。
  - ③ 7月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① 梅雨末期の多雨で急激に病勢が進展するため、降雨後は早急に防除する。
  - ② ほ場の排水を良くし、多湿にならないようにする。

### 2. モザイク病

- (1) 予報内容 発生量 やや少
- (2) 予報の根拠
- ① 紀の川市の露地栽培ナス、トマト、シシトウでは6月5半旬現在、発生を認めていない。
  - ② 日高地域の露地栽培ミニトマトでは6月5半旬現在、発生は認めていない。
  - ③ 7月のアブラムシ類の発生量は平年よりやや少ないと予想される。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① アブラムシ類の防除を徹底する。

## <野菜全般>

### 1. アブラムシ類

- (1) 予報内容 発生量 やや少
- (2) 予報の根拠
- ① 紀北地域の露地栽培ナスでは6月4半旬現在、アブラムシ類の発生を認めていない（モモアカアブラムシの平年寄生葉率7%、ワタアブラムシの平年寄生葉率6%）。
  - ② 紀中地域の露地栽培スイカでは6月5半旬現在、ワタアブラムシの発生は1葉あたり0.1頭（平年0.4頭）であった。
  - ③ 黄色水盤（紀の川市）への6月1～4半旬の飛来数は、29頭（平年123頭）である。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① ワタアブラムシ、モモアカアブラムシは、ともに薬剤感受性の低下がみられるので、同一薬剤の連用は避ける。

### 2. ハダニ類

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
- ① 紀北地域の施設栽培ナスでは6月5半旬現在、カンザワハダニの発生は認めていない（平年発生ほ場率18%、平年寄生葉率4.2%）。ナミハダニは発生ほ場率11%（平年4.4%）、寄生葉率1.1%（平年0.4%）であった。
  - ② 紀北地域の露地栽培ナスでは6月4半旬現在、カンザワハダニの発生ほ場率56%（平年44%）、寄生葉率9%（平年10%）と平年並であった。ナミハダニは発生ほ場率11%（平年9%）、寄生葉率1.7%（平年3.0%）

であった

- ③ 紀中地域の露地栽培スイカでは6月5半旬現在、カンザワハダニは1葉あたり0.3頭（平成0.4頭）、ナミハダニは1葉あたり0.5頭（平成0.2頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 薬剤抵抗性対策として、同一薬剤の連用を避ける。

### 3. ミナミキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 紀北地域の施設栽培ナスでは6月5半旬現在、発生ほ場率44%（平成34%）、寄生葉率3%（平成14%）であった。  
② 紀北地域の露地栽培ナスでは6月4半旬現在、発生ほ場率33%（平成24%）、寄生葉率8%（平成4%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 発生が多い場合は4～5日間隔で2回以上、薬剤を散布する。  
② 施設栽培では、栽培終了後に7～10日間施設を密閉して死滅させ、後作の発生源にならないようにする。

### 4. ミカンキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 紀北地域の施設栽培ナスでは6月5半旬現在、発生ほ場率11%（平成11%）、寄生葉率1.1%（平成3.8%）であった。  
② 紀北地域の露地栽培ナスでは6月4半旬現在、発生ほ場率22%（平成21%）、寄生葉率5.0%（平成4.2%）と平成並であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① ミナミキイロアザミウマの項に準ずる。

### 5. シロイチモジヨトウ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 紀中地域の露地栽培スイカでは6月5半旬現在、被害果率が0%（平成3.4%）と平成に比べやや少なかった。  
② フェロモントラップの6月1～4半旬の誘殺数は、紀の川市2頭（平成9.9頭）、御坊市27頭（平成77.2頭）である。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 若齢幼虫を対象に初期防除に努める。  
② 幼虫は作物の生長点付近の未展開葉の芯部に潜入するので、薬剤による防除効果が上がりにくい。初期は局部的に発生するので、管理作業時に見つけしだい捕殺する。  
③ 施設栽培では、栽培終了後に20日程度施設を密閉して死滅させ、後作の発生源にならないようにする。

## Ⅲ. 果 樹

### <カンキツ>

#### 1. 黒点病

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県予察ほ場における初発は6月16日と平成より遅く、6月中旬の発病果

率は無防除区0.8%（平年31.2%）、防除区0%（平年2.5%）であった。

② 紀北（海南市下津）、紀中、紀南（田辺市以北）における6月4半旬現在の発病果率は0.6%（平年6.3%）、発病園率は13%（平年28%）であった。

③ 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① マンゼブ・マンネブ剤の場合、前回の薬剤散布からの累積降水量が250mm程度となった時点で散布する。

② 枯枝や剪定枝の処理を徹底する。

③ 過乾燥等で樹勢が衰弱すると枯枝が増えるおそれがあるので留意する。

## 2. かいよう病

(1) 予報内容 果実発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県予察ほ場（無防除）における6月中旬の春葉の発病葉率は0.3%（平年20.4%）であった。

② 紀北（海南市下津）、紀中、紀南（田辺市以北）における6月4半旬現在の春葉の発病葉率は0.9%（平年1.3%）、発病園率は20%（平年20%）であった。

③ 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 発病園では無機銅剤（薬害軽減のための措置を講じる）を散布する。強風雨に遭う前の予防散布が重要である。

② 罹病葉は果実への伝染源になるので剪除する。

③ 防風ネット設置などの防風対策に努める。

## 3. ミカンハダニ

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

① 紀北（海南市下津）、紀中、紀南（田辺市以北）における6月4半旬現在の発生園率は61%（平年36%）、100葉あたり雌成虫数は82頭（平年69頭）、寄生葉率は18.7%（平年17.7%）といずれも平年より多かった。

② 6月下旬の気象と7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① ミカンハダニは高度の薬剤抵抗性系統が出現しやすいので、薬剤抵抗性対策としてマシン油乳剤の散布を励行する。ただし、高温強日射時の散布は薬害が発生しやすく、7月中旬以降の散布は果実品質を低下させるおそれがあるので、散布は7月上旬までとする。

## 4. ヤノネカイガラムシ

(1) 予報内容 発生量 並

発生時期 第2世代1令幼虫初発日 7月5半旬

(2) 予報の根拠

① 県予察ほ場（無防除）における第1世代1令幼虫の初発は5月18日（平年5月17日）と平年並であった。

② 紀北（海南市下津）、紀中、紀南（田辺市以北）における前年10月の発生園率は3%（平年7%）、寄生果率は0.1%（平年0.4%）であった。

③ 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 6月下旬に防除できなかった園では、7月上旬のうちに97%・98%マシン油乳剤の200倍やスプラサイド乳剤40の1,500~2,000倍で防除する。

② 未成熟成虫がみられる場合はスプラサイド乳剤40を1,500倍で散布する。

## 5. チャノキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

① 県予察ほ場（無防除）における6月中旬の黄色粘着トラップへの誘殺数は平年並であったが、日高郡由良町、有田川町、広川町、湯浅町の現地ほ場に設置した黄色粘着トラップで6月3半旬から増加してきている。

② 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 地域での発消長調査の結果により、適期防除に努める。

## 6. ゴマダラカミキリ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県予察ほ場、各地域とも成虫の初発の発生時期は平年よりやや早かったが、6月中旬の発生量は平年並であった。

② 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 発生園では成虫の捕殺に努めるとともに、登録のある薬剤を散布する。さらに発生が多い園では7月中旬以降に登録のある農薬を主幹から株元に散布する。

## <カ キ>

### 1. 炭そ病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 紀北地域では6月3半旬現在、新梢の病斑は認められなかった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 発病枝や果実が見られる場合は剪除する。

② 密植園や風通しの悪い場所は発病しやすくなるので、園内の通風・採光をはかり、薬剤をかかりやすくする。

③ 薬剤は発育枝にも十分散布する。

### 2. うどんこ病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 紀北地域では6月3半旬現在の発病葉率は「富有」で2.4%（平年3.0%）と平年並であった。「平核無」・「刀根早生」で0.1%（平年0.6%）と平年よりやや少なかった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 菌は葉裏の気孔から侵入するので、葉裏に丁寧に散布する。

② 盛夏期には一時休止するが、好適な気象条件や園地条件によっては発病を繰り返すので、二次伝染の防止に努める。

### 3. 円星落葉病、角斑落葉病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報根拠

① 紀北地域における前年10月の「富有」における円星落葉病の発病葉率は、8.8%（平年3.6%）と平年よりやや多かった。角斑落葉病の発病葉率は17.9%（平年22.7%）と平年よりやや少なかった。

(3) 防除上考慮すべき諸点



- ① 樹勢の低下が発病を助長するので、肥培管理に努める。
- ② 円星落葉病の子のう胞子飛散は、7月中～下旬までの降雨後に多くみられるので、この時期に薬剤を定期的に予防散布する。

#### 4. フジコナカイガラムシ

- (1) 予報内容 発生量 やや少
- (2) 予報の根拠
  - ① 紀北地域における6月3半旬現在の寄生果率は「富有」で2.6%（平年8.2%）と平年よりやや少なかった。「平核無」・「刀根早生」で0%（平年1.0%）と発生は認められなかった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
  - ① 本年のフジコナカイガラムシの発育の早晩は平年並と予想されるので、次回の防除適期は8月上・中旬頃になると予想される。

### <モ モ>

#### 1. せん孔細菌病

- (1) 予報内容 発生量 やや多
- (2) 予報の根拠
  - ① 紀北地域における6月3半旬現在の発病葉率は5.6%（平年4.5%）と平年よりやや多かった。発病園率は80%（平年67%）と平年並であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
  - ① 防風ネット、防風垣などの耕種的防除を励行する。

### <果樹全般>

#### 1. カメムシ類

- (1) 予報内容 発生量 やや少
- (2) 予報の根拠
  - ① 県北部での本年の越冬量は、0.04頭（平年0.23頭（極端に越冬量が多かった年を除く））と、平年に比べやや少なかった。
  - ② 県南部での越冬成虫の捕獲地点数は2か所、捕獲頭数は2頭（極端に越冬量が多かった平成8年を除く過去20か年の平均4.1か所、7.4頭）と平年に比べ少なかった。
  - ③ ヒノキ花粉飛散数比（本年／前年）は7.9であり、カメムシの発生量に対して餌となる球果の量が多くなると考えられるため、果樹園への飛来は少ないと考えられる。
  - ④ 日高郡みなべ町の5月から6月中旬までの予察灯における越冬成虫および新成虫の誘殺数は、やや少なかった。
- (3) 防除上注意すべき諸点
  - ① カメムシ類の最新の発生状況は、農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ内の農作物病虫害防除所コーナー果樹カメムシ情報を参照する。
  - ② 農薬については最新の登録情報（農林水産消費安全技術センターHP農薬登録情報提供システム：<http://www.acis.famic.go.jp/searchF/vtllm000.html>）を参照し、適正に使用する。

本情報は、下記の方法でもご覧頂けます。

○**農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ** <農作物病虫害防除所コーナー>

[http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/  
boujyosyo-yosatsujyouhou.html](http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/boujyosyo-yosatsujyouhou.html)

○**和歌山県ホームページ** <わかやま県政ニュース>

<http://wave.pref.wakayama.lg.jp/news/kensei/>

※詳しくは、農作物病虫害防除所(TEL 0736-64-2301)までお願いします。